

各界でユニークでエネルギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち、その活躍分野は多岐にわたっています。

彼女たちはいかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？

第21回は、北京大学を卒業後、留学生として一橋大学で博士号を取得し、現在成城大学にて教鞭をとる、金春姫さんです。

聞き手は、商学研究科准教授の山下裕子です。

## 新しいアジアの絆

出世に男女は関係ない。  
躊躇なく子女を送り出す中国の親たち

山下 金さんには、中国での調査プロジェクトのとき、とても助けていただきました。対日感情と日本製品に対する態度形成をテーマにした博士論文も素晴らしい出来でしたね。母国語ではない言語であれだけのものを書くのは大変だったと思います。改めて、一橋大学に留学されるに至った経緯を教えてくださいませんか。

金 ありがとうございます。私は、北朝鮮との国境に近い延吉市郊外の村で生まれました。延吉市は吉林省延辺朝鮮族自治州の州都で、わが家も祖父の代（1910年ごろ）に北朝鮮から逃れてきたんです。ですから、子どもの頃は家でも普通の生活でも朝鮮語を話していました。中国語は日本の英語のように学校で学びました。将来はどこかへ留学したいと思ったのは、大学時代ですね。地元にいるのも飽きたし、北京もあまり好きになれず、どこかほかの国に行ってみたいなと（笑）。

山下 日本語はどこで学ばれたのですか。

金 中学校です。中学では語学は日本語か英語を選択するのですが、私のときは日本語を学ぶ人が多く、英語クラスが1クラス、日本語クラスが6クラスありました。いまは親以外とは中国語か日本語で話す場合が多いですが、とっさに出てくる言葉は朝鮮語だったりして自分でもビックリすることがあります。

山下 中国では成績による選抜が厳しいそうですね。まして農村部からですと、よほど成績がよくないと最重点大学である北京大学への進学は難しいと思います。日本では女の子を地元で進学させたがる親も多いのですが、中国ではどうですか。

金 私の通った高校は重点高校でしたが、それでも成績のふるわない人は地元の大学への進学となります。中国では親が一番望むのは子どもの出世ですし、親も子もレベルの高い大学への進学をめざします。男女は関係ありませんね。

山下 金さんの人生にとって最初の転機が北京大学への進学だったわけですね。

金 そうですね。私にとって大きな一歩でした。中国国内で、北京大学の学生は伝統的に反骨精神を持っていますし、お互いの意見を尊重しあう風土があります。私も、比較的自由な発想をする意思が芽生えるきっかけを与えてもらったと思います。



### 金春姫 (Chunji Jin)

1978年中国延吉市生まれ。2000年北京大学を卒業後、一橋大学に留学「中国における日系製品に対する消費者購買意図の形成—対日感情が消費者行動に与える影響を中心に—」をテーマに博士論文を書き、2007年商学研究科より博士号を取得。  
現在は、成城大学経済学部経営学科にて講師を務める。

**山下** 北京大学の学生はとにかくよく勉強しますね。私が訪ねたときも、夜中の3時、4時まで灯がついていました。

**金** 自習室はいつも満員。一橋大学の学生より勉強します (笑)。

**山下** 北京大学からだアメリカへ留学する人が多いでしょう。なぜ日本を選んだのですか。

**金** みんなアメリカへ行きたがるので、私は違うところへ行こうと思ったんです (笑)。日本語の方が英語より身につけていたということももちろんありました。私の学生時代は、欧米や日本の豊かさ、生活水準の高さは大きな魅力でした。でも、いまは上海や北京は、欧米や日本とさほどかわりません。やりたいことが特に見つからない場合に海外へ行くというケースも多く、海外で学んだから必ず有利ということはなくなったと聞いています。逆に中国のことをあまり知らないし、海外留学のための投資を回収するのに時間がかかります。

**山下** 留学先としてはいまでもアメリカが一番ですか。



**金** そうだと思います。一橋大学は、日本語を学んでいる人は知っていますし、北京に大学の事務所ができてから知名度は上昇しています。でも、概して男子の方が日本への抵抗感は強いですし、アメリカへ向いている学生を日本に呼ぶのは工夫がいると思います。中国からは理系の留学生が多いですが、理系に限定せず、日本文化のわかる人や潜在的にわかりそうな人、日本文化に興味をもつ人に来てもらった方がいいと思います。

## 反日感情が噴出する中、 日本最良は敵対される

**山下** 金さんが一橋大学を選んだのはどうしてですか。

**金** 日本へ留学する選択肢としては、東大と一橋大学の二つがありました。私は事前に二校を実際に訪ね、一橋大学に決めました。こちんまりとした大学で学生も気さくな感じ、キャンパスの雰囲気がとても良かったことが決め手でした。

**山下** 2000年来日し、去年まで6年間一橋大学で学ばれましたね。いま振り返ってどうですか。

**金** 前半の修士時代は学部時代の延長で、勉強して単位を取ったという感じ。ちょっとムダにしまったかなという思いがあります。でも、その過程を踏んできたからこそ興味をもってしっかり勉強しようという意思が生まれたのだと思います。

**山下** 端で見ていると、アルバイトとの両立が大変そうだったけど、実際はどう？



**金** 大変だったのはやはり博士論文ですね。書けるだろうと甘くみていたのです (笑)。途中でテーマを変えてからは、意欲も沸きましたし、気持ちの上でもラクになりました。

**山下** 対日感情と日本製品に対する態度形成という卒論は、どのくらいで書き上げたのですか。

**金** 1年弱です。前のネットワーク理論をテーマとしていたとき、中国の学生百数十人にインタビューをしていましたから、そのデータが使えたというメリットもありました。小泉政権のときは反日感情がピークで、日本にいる中国人は肩身の狭い思いをしましたが、一時帰国の際の食事会などでたまたま誰かが日本にいるよといった話になると、場の雰囲気がまずくなるということもありましたね。私のように中国と日本の真ん中にいる人間にとっては、反日感情は意識せざるを得ないテーマでもあるんです。

**山下** 中国での調査や金さんの論文を読み、反日にも複雑な思いがあるということがわかりました。世間や世間体ということがあるでしょう。日本製品を使っていることがどう思われるのかは、消費構造にもかなりの影響がありますね。

**金** メイド・イン・ジャパンは品質が高く評価が高い反面、日本製品を使っている人は日本最良と思われるからと周囲の目を気にして避けるといったこともありました。反日色が濃厚なときは、



特にそうでしたね。いま中国経済も発展してきましたので、欧米だからどうということも薄れてきていると思いますし、若い人

山下裕子 (やました・ゆうこ)  
商学研究科准教授



のなかには日本文化が好きという人も増えています。

**山下** 金さん自身は、日本文化についてはどう思っていたのですか。

**金** 留学前は、日本語以外はほとんど知りませんでした。いまでも大河ドラマを見ようとは思いませんけど（笑）。博士論文のためのインタビューで会った人民大学の女子学生は日本のドラマが好きだと言っていました。

## 大学卒が保証にならない、 厳しい中国の就職事情

**山下** 金さんはいま成城大学で専任講師をしています。中国の大学に戻るといことは考えなかったのですか。

**金** 考えなかったわけではありませんが、日本の大学の方が教育や研究に専念できる環境があります。中国では指導教授の力が強く、教授と良好な関係を築くことに注力しなければいけないのです。率直に言えば、人間関係の力はまだ強いですね。

**山下** それだけ競争が厳しいということでもあるのでしょうか。

**金** 経済の発展につれて競争も激化していると思



います。いまは大学卒だからといって就職がラクとは限りません。特に女性は出産等のハンディがありますから、キャリア形成はだんだん厳しくなっていると思います。

**山下** 日本企業に就職することを中国の人はどう考えていますか。

**金** 日本に限らず外資系企業への就職は、給与などの面で以前ほど魅力ではなくなっています。知名度という意味では、その企業がどこまで中国進出に本腰を入れているかとリンクしています。

**山下** これから研究者として歩んでいかれるわけですけど、金さんは自分が書いた論文をどういうところで評価されたいと思っていますか。

**金** 私の関心領域で言えば、興味をもち、理解してくれるのはやはりアジアです。とはいえ、国際社会で論文を発表するためには英語で書かなければならないのです。学術分野では、日本も中国も韓国も視線は欧米に向いており、お互いをあまり見ていないと思います。客観的に言って言葉の壁はありますが、乗り越え、お互いに連携することができたら面白い研究ができると思います。

**山下** アジア人同士なのに、研究は英語というお互いにとっての異言語を介さなければならぬわけですね。金さんの指摘は、とても貴重な示唆だと思います。最後に、金さんのこれからのキャリアプランを教えてください。

**金** 私は日本で学び、いま日本の大学で教えていますが、現時点ではとてもハッピーです。成城大学の学生を見ると、とてものんびりしている（笑）。気持ちにゆとりを持てるというのは、いいことだと思います。長期的なプランは未定ですが、いまはこのゆとりのある環境のなかでいい仕事をしていきたいですね。やれるだけのことをやろうと思っています。

## 対談を終えて 「60年代生まれは忘れられた人たちです」

COEプロジェクトの成果をまとめた著作、『ブランディング・イン・チャイナ』の中、金さんが執筆された化粧品の記事の冒頭の一節である。上海あたりの若い女性は高感度なメイクをして街を闊歩しているけれど60年代生まれの女性たちは化粧を知らないで育った世代なのである。同じ世代に属する私としては、幾重にも複雑な気持ちになったものだ。

怒涛のように活気付く中国の現場は圧倒的に若い。新聞雑誌の社長は30歳、編集長は25歳。日本の戦後もこんな感じだったのだろうか…。金さんの淀みのない通訳のおかげで、彼らの威勢のいい

野望、どこか醒めた冷静な目、意外にあどけない心が垣間見える。「何事も停滞している日本より、中国にいた方が面白いんじゃない?」、金さんに聞いてしまったりもした。

中国とは好対照に、何事も穏やかにしか変わらないのが日本である。その中でも大学の改革は遅い。女性の採用、ましてや外国人の採用はなかなか進まない。そんな訳で、金さんの採用が決まった際には、本当に嬉しかった。大先輩である木綿良行先生が決断してくださったという。「実力のある人を採用していかなかったら、大学はどんどん衰退していってしまう。」長年勤めた大学を去

るにあたっての、自分の後任人事に際し、何と深く清々しい態度だったのだろうか。

実力ある人材を活かせるのは、実力ある社会である。木綿先生がなさったような一つ一つの決断が積み重なることで、静かな国日本の改革は進むのだと信じていた。そのような静かな決断が、アジアの若い世代に新しい絆を結んでいくのだと思う。天安門事件のとき、一橋大学でも多くの60年代生まれの若者が中国の留学生とともに怒り涙した。あれから20年、アジアが積み重ねた年月の重みを忘れず、新しい若者たちに絆を結ぶ「忘れられない世代」となりたいものだ。